

翻訳 マックス・ノイブルガー著 自然治癒力学説史,
1926, 序章, 第1章

細 見 博 志

要 旨

19世紀の前半は、いわゆる英雄的医療という名前の乱診乱療と多薬投与がはびこった時代である。19世紀の最後の4半世紀からは、瀉血や下剤の乱用を批判する近代医学が登場するが、後に言われる特異的病因論の誤謬に陥り、やはり自然治癒力の軽視という轍を踏むことになった。1926年当時、当時の免疫学などの知見に照らして、自然治癒力を生かした非侵襲的医療が重要であると考えたウィーン大学医学史の教授、ノイブルガーは、その概念の歴史をヒポクラテスの昔から19世紀前半までたどった。第1章は古代と中世におけるその概念の歴史である。「自然は病気の医者である」というヒポクラテスの自然観は、古代ギリシアやローマの世界において重視されたが、「自然は時には有害である」というアスクレピアデスのことばに見られるように、鋭い反発を招く。両者の対立は、保全的対積極的、非侵襲的対侵襲的、という医療のあり方の対立とも絡む。やがて中世にいたり、ヒポクラテスに与するガレノスの影響にもかかわらず、自然治癒力の概念は、ほとんど影響力を喪失してしまうのである。

KEY WORDS

vis medicatrix naturae, physis, Hippokrates

翻訳 マックス・ノイブルガー著、自然治癒力学説史、細見博志訳。

【凡例】この翻訳はウィーン大学医学史教授、医学・哲学博士、マックス・ノイブルガー（1868-1955）著、自然治癒力学説史、1926（Die Lehre von der Heilkraft der Natur im Wandel der Zeiten, 1926, Verlag von Ferdinand Enke/Stuttgart, von Dr. med. et phil. Max Neuburger, o. ö. Professor für Geschichte der Medizin an der Universität in Wien）、の序言、序章、第1章、1-25頁、を翻訳したものである。全文は全4章、索引4頁を含んで212頁であり、今回訳出したのは全体の8分の1にあたる。川喜田愛郎、『近代医学の史的基盤』、上・下、1977、では、ノイブルガーの『医学史』（Geschichte der Medizin）、上・下2巻、1906-11、はもっとも信頼すべき医学史の一つとして註において度々言及されているが、同時に同著者の『自然治癒力学説史』も、ヒポクラテスの『自然』の概念を理解するために欠かせない

ものとして紹介されている。私自身は、「特異的病因論」（ルネ・デュボス）などに見られる近代医学の陥った隘路を脱却するためのヒントを求めて、この書物に向かった。同時にこの「自然治癒力」という概念は、現代の代替医療やホリスティック医学などでもキーワードとなっている。私個人の関心の一端は、拙論「ヒポクラテスの『自然治癒力』をめぐって」（金沢大学医学部保健学科紀要、第22巻（1998）、45-54頁、に記している。

なお、原文ゲシュペルト（隔字体）は〈…〉、日文引用符は「…」、ギリシア語の引用は〔G〕、ラテン語の引用は〔L〕で、原著の頁は〔S. 23〕の如く、示した。ギリシア語、ラテン語の原文は、特に重要なものを除いて引用しなかった。原注は本文の該当する箇所に*で示し、その段落の切れ目に小字で挿入した。訳者の補足と註は、〔…〕で括弧本文中に繰り込んだ。また、ヒポクラテス全集の訳に関しては、『新訂 ヒポクラテス全集』全3巻、大槻真一郎編、1988年、エンタプライズ株式会社、

におおむね従った。

ギリシア語、ラテン語に関して、多くの方々に教えていただいた。特に嘉野坦道先生（元日本女子体育大学教授）には、懇切丁寧なご指導にあずかった。また医学史に関して、平尾美智子先生（山梨県立看護大学）には原文と拙訳を照合していただき、ガレノスの *Ars medica* と *Ars parva* が同一であることなど、幾つかの重要な教示をいただいた。ここに記して感謝を表す】

献 辞

宮廷顧問官教授アントン・フォン・アイゼルスベルク男爵 [1860-1939, ウィーンの外科学教授ビルロートの弟子, コッホ研究所に学ぶ] に尊敬をもってこれを捧ぐ

序 言

医学の研究者や実地家にとって問題史（論争史）こそが医学史の最も重要な領域であると私は確信するものであり、その確信に基づいて、〈自然治癒観〉の展開を徹底的、統一的に取り上げた初めての試みがこの書物である。現代医学の主潮流を眺めて過去を考察すれば、通常古代医術を前にしても必ずしも注目されなかったある種の特徴が、くっきりと浮かび上がってくるのである。

この書物の題名に〈自然治癒力〉という術語を用いたのは、ここで扱われているヒポクラテスから19世紀半ばまでの時代にとって、この術語が歴史的に最もふさわしいからである。

〈自然治癒力〉という研究対象が形をなした歩みは極めて遅々としたものであった、というのも専ら学位論文や専門論文という形式で存在する特殊な文献は、必ずしも原文に忠実ではないためにほとんど考察の対象とはならず、他方で真に有益な考え方や事実、昔からの医学文献をすべて渉猟し尽くしてはじめて、しかもその隠された片隅に、見いだされることがしばしばだからである。しかもその際、医術の進歩には必ずしも重要ではない著述家たちも顧慮せねばならなかったのはいうまでもない。また叙述が過度にくだくだしくならないように、長年の研究で収集した素材のうちの僅かしか用いることができなかった。

とまれ私が希望するのは、錯綜した文献の森の中で少なくとも何本かの行き来できる小道を切り開いたということである。

ウィーン、1926年6月 著者。

目 次

序 章 (S. 1-3)

第1章 古代・中世の自然治癒力説 (S. 5-25)

第2章 16, 17世紀の自然治癒力説 (S. 26-58)

第3章 18世紀の自然治癒力説 (S. 59-126)

第4章 19世紀前半の自然治癒力説 (S. 127-208)

索引 (S. 209-212)

序章 [S. 1]

モットー：自然治癒は秘密にあふれ予期せぬ発見の源であるので、その研究を推奨するのにどんなに熱心であってもあり過ぎることはない。——K.F.H. Marx [独・ゲッティンゲン大学医学部教授、就任公開講義『医学的安楽死』(De euthanasia medica) (1826) が知られている]

過去の歴史を知る医者にとって、医学の発展の過程において、現代という時代ほど様々な形で過去を振り返る刺激に充ちあふれた時代はないであろう、といっても恐らく誇張ではあるまい。現代に見られるような豊かさで、かの詩人 [ホラチウス] の言葉が真実となった時代は今までなかったことである——「すでに滅びたる多くのものが再び生まれ出づるならん」(Multa renascentur, quae iam cecidere)。病理学や治療法の領域で古代の理念が明々白々な形で復活しているのを私たちは目撃している、——もっともそれは、新しい衣装をまとい本質的により高次の認識段階で、ではあるが。

わずか二、三十年前までに、伝統の断絶は決定的なものとなり、古い医学と新しい医学の連関は徹底的に廃絶されたように思われた。しかし今日指導的な人士が進んで認めるのは、過去の歴史の破壊によって価値ある貴重なものが多く失われたということであり、まさしく科学の発展の全過程から見て、過去の人々が推測したことを、現代生物学に立脚して再建することが、是非とも必要になっているのである。

病理解剖学と生理学的診断学が病氣研究のほとんど唯一の手段であった時代、病氣の座という考え方が専ら支配的であった時代、外科は別として、治療が懐疑主義と経験論の間を動揺していた時代、そのような時代から私たちは離脱してまだ二世以上は経っていない。当時、厳密さに固執する余り、医学の伝統的な遺産の多くは浪費されてしまった。伝統的な治療法は、ほとんど無視できる量 (quantité négligable) にまで切り下げられ、後にはかろうじて対症療法としてのみ科学的に正当化されるにとど

まった。のみならず病理学の領域においてもそうであった。いくつか例を挙げるとするならば、病因論的な要素や体質論的な関連は閑却され、病気の一般理論や結核の伝染性などは否定された。

[S. 2] 例えば熱病の治療や結核感染症の治療の領域などで、[当時の] 治療法からの転換が散発的に始まるようになってから、あるいは新興の細菌学の影響下に病気の外在的な因子が一時的、一面的に過大評価をされていたのが終わってから、1890年代になって病理学と治療学の見方に、深刻で全面的な変化が生じたのであった。

血液と組織液、局所的病気の基にある一般的罹病、病気にかかりやすい素質や素因、体質、器官の相互関係、精神的な影響、などはそれ以来、そして現代においてはさらなる広がりや深みを見せながら、研究と治療においてますます大きな関心を寄せられているのである。

すべては依然として流動的であり、一つの問題は別の問題を引き起こす。構想力や創造力の豊かな過渡期のこの時代にあっては、すでに過去に——もとより全く異なる形で、ではあったが——なされた主張も、全く新しい様相を呈するし、極めて洗練された研究方法によって全く新鮮な魅力を獲得することが多い、——もっともその底に潜む基本的考え方はずっと昔に遡るものであったりするのだが。

そのような基本的考え方の一つで、しばしの潜伏期を経てというべきか二・三十年の不人気の後でというべきか、現代の研究者の注目を集めている古代からの考え方といえ、それが〈自然治癒〉(die natürlichen Heilungsvorgänge)であり、別の表現を用いれば、「自然治癒力」(Vis naturae medicatrix)である。

医学の理論と実践にとってこの考え方に、年数や普遍的意義において比肩できるものはほとんどないし、最近の二、三十年の医学と治療の成果を洞察する人にとっては、この考え方こそ来るべき医療技術のあらゆる進歩のために道を切り開き目標を定めるものだ、という確信を禁じ得ないであろう。というのも、未来がどれほど偉大な可能性を自らのうちに蔵していようと、結局のところどんなに活動力のある医者にしても生体 (Organismus) そのものに潜む力を認識し、使用できるあらゆる手段でこの力を作動させたり規制したり、煽ったり抑えつけたりせねばならず、つまりは医者というものは、治癒を目標として自然の単なる僕ではなく同時に主人にならねばならないのである！自然の反応が自然のしくみ

や作用範囲を通してどうなるかを洞察し、生体に眠る力を実際の活力に転換させる潜在的な力を持つことによって、医者は最高レベルの技術者となることができる。そうすることによって医者は自然治癒力 (Naturheilkraft) を自家薬籠中のものとし、自然治癒力にとって障害となるものを除去し、盲目的に支配する自然諸力を合目的的に使用する力を獲得することができる。しかし自然治癒力に対して無知と未経験のままであれば、なすすべもなく傍観するか、あるいは生体という歯車に妄りに手を出して邪魔するだけに終わるだろう。[S. 3] 〈自然治癒力とはなにかという問題は、極めて大きな問題であり、医者がこの何千年間直面してきた問題の中でも最大の問題であるといってもよいかも知れない〉。実際この問題こそ医学の唯一の問題であろう、というのもこの問題をどう解決するかで、医術の存在意義や目標や限界が左右されるからである。

〈生体の自然治癒過程と防御機構に関する学説〉は、最近の免疫性の研究や内分泌、炎症や再生、器官や調節機構の相互関係、などの研究によって予想もしなかった進展を見せ、治療上でも驚くべき成果を上げた。この学説こそは〈医学史を貫く赤い糸〉である。この学説によって科学的な治療学は生まれ、発展してきたのであり、逆にこの学説を誤解して適用したことからの取り返しのつかない誤りも生じたのである。〈医学者たるものほとんど誰もこの学説に、直接間接に意見を表明したし、また表明せねばならなかったのである〉。

自然治癒過程の考察と認識の歴史を書こうと思えば、素材を完全に加工ししかも批判的に取り扱うことが必要であるが、そのような歴史家としての浩瀚な知識に加えて、医学の実地家としての観察の鋭さや、自然科学者としての考察方法も不可欠である。それらが合わさって初めて、自然治癒力に関する学説史は、医学の思惟と行動に関する心理学の主要部分を構成することになり、ひいては医学史と医者との歴史の主要部分を構成することになるだろう。

第1章 古代・中世における自然治癒力説 [S. 5]

【Quid aliud egerunt viri ingenio et doctrina prae-cellentes, illi instaurandae medicinae inter <Graecos et Arabes> principes? quam sibi proposuerunt studiorum metam, nisi ut id ipsum intelligerent <Naturam> sequi, ita tamen sequi, ut arte eam, ubi opus esset, inflectere et regere possent? Freind】

【才能と学識において優れた人々が、「ギリシア人

とアラビア人」の創始者の間で始められたかの医学にもたらしたものは、他でもなく自らの研究の目標を定めることであった、つまり、「自然」そのものに従うことを学ぶことであり、それは、必要とあらば技術を用いて自然を変更し、自然を支配することができるようなかたちで、自然に従うことであった。——フレンド [John Freind, 1675-1728, イギリス, *The History of Physick*, 1725-6, の著者]]

古代オリエントの医学文献では、治癒といえば、天上の神々のなせるわざか薬や創傷医のおかげかでしかなかったが、〈ヒポクラテス全集〉ではじめて、〈自発治癒〉(Spontanheilung)の出現が事実として確認され、病的な状態における〈生体の自助〉(Selbsthilfe des Organismus)が医者としてのものの見方や合理的な治療方法の前提とされた。この根本的な見方こそが呪術的・経験的な医療と科学的な医療との相違をなすものであり、こうした見方あるいは〈自然治癒過程という思想〉(Idee des natürlichen Heilprozesses)に、ヒポクラテス全集は、それがコス学派の精神を表現している限りで、満ちているといえる。コス学派においては何世代にもわたって病氣経過の観察がなされてきたが、そのような観察は乱診乱療(Polypragmasie)を慎む姿勢とあいまって、次第に次のような洞察を醸し出してきた、——つまり、病氣は他のすべての自然現象と同様に、ある種の合法則性や時間的な規定に服し、〈生体はけがをしたら単に受け身的にふるまうだけではなく、自己調節によってけがから自ら回復しようとし、症状というのは病氣への屈服と防御の両方の徴候からなるものであり〉、この両方の兆候を見て診断と治療を行うことができる、などである。このように見てくると、病氣は単に「苦しみ」(pathos)というだけでなく、なにか「仕事」(ponos)でもある。病氣はからだの諸機能が均衡を損なった場合、それを回復する体の努力でもあり、治癒は生体の自助のわざであり、生体が単独かあるいは技術に支えられて目的を達成する治癒本能のわざである。

[S. 6] 「自然は病氣の癒し手である」(nouson phusies ietroi [文字通りには、諸自然は病氣の医者である])、とヒポクラテスの『流行病』(第6巻第5章第1節)は簡潔に語っているが、それは正確に理解されれば永遠の真理である。

ヒポクラテスは病氣の時の自然(physis)の働きを極めて綿密に観察し、著作の至る所で病歴を鮮やかに語り、そのことによって自然の働きを証言している。しかし「自然」(Natur)の本質や治癒本能を

思弁的に語ることは拒絶した。それでも個々の言及からヒポクラテスが「自然」でもって生体全体*を意味していたことは見て取ることはできる。〈治療努力は生命の動きの一面をなしているに過ぎず〉、後世の著作家の多くが言う特殊な「自然治癒力」(Naturheilkraft)**というものは、ヒポクラテスのあずかり知らぬ所であった。「自然はあらゆる事物をあらゆる点において充たしている」(physis exarkeei panta pasin) (『栄養について』[15節])、つまり合目的に作用する、と「自然」(Natur)について述べるときも、ヒポクラテスの考えている〈「自然」(Physis)の働き〉とは、鉄のような法則に服し〈必然的に生起する〉働きなのである。「自然は自分で道を見いだす、熟慮してのことではない(ouk ek dianoiēs)」。『自然は教わったりせずなにも習わないが、自らの職責を果たす』[G] (『流行病』第6巻第5章[第1節])。

* [ヒポクラテスの]『人間の自然性について』において、自然とは基本的な四体液の統合である、と語られている。四体液が身体を自然を構成し、病氣や健康になるのもそのせいである。「人間の体は、その中に血液、粘液、二種の胆汁、つまり黄胆汁と黒胆汁がある。これらがそのからだの自然であり、これらによって人は苦痛を覚えたり健康になったりする」[G] [4節]。体の基本的な四構成要素の混合と同じ意味で、physis (自然)という言葉は他の個所でも用いられているが、ヒポクラテス全集全体では必ずしも一致した使い方はない。それゆえガレノス(Galenos) [129-199頃、古代においてヒポクラテスに次いで有名な医者、小アジア北西部ペルガモン出身] (『ヒポクラテスの「急性病の摂生法について」注釈』(Hipp. de acutor. morb. victu Comm.) II, 31) も言うように、「ヒポクラテスにおける physis (自然) という名称の意味は様々であり」[G]、physisのもとで時には四〈性質〉(温、冷、湿、乾)、時には〈四体液〉、の〈協力〉が含意されている。時には〈植え付けられた熱〉(to symphyton thermon)が〈あらゆる自然作用の究極原因〉と見なされている(ガレノス、『ヒポクラテスとプラトンの教説について』de placit. Hipp. et Plat. Lib. VIII, cap. 7)。[ヒポクラテスの]『肉質について』ではヘラクレイトスに依拠して、熱を万物の根本原因としている注目すべき個所がある。「私の考えでは、熱と呼ばれるものは不死であって、それはすべてを意識したり、見たり、聞いたりするとともに、現在のことやこれから先起こることをすべて知っている」[G] [同第2節]。

**ヒポクラテスにおいて「自然」とは、〈合法則性〉であったり、〈本質や実体〉であったりするが、力という概念は彼には希薄である。

[S. 7] 患者が医者の手当てを受けずに病が癒えることがある、というのを見れば、身体の中に治癒本能が存在しているという推測が生じたのは当然

である。どこで治癒本能は働くのか、また「自然」(Physis)は病気の時どのように作用するのか、ということを解明するために、手元にある経験や理論は十分な根拠を与えてくれた。古代より人々に認められてきた事実は、分泌物や排泄物の量や性質こそ実に様々ではあるが、ある特定の症候状態でこういった排泄物が出るのは、良きにつけ悪しきにつけ転帰の前触れであることが稀ではない、ということである。そこから当然のここのように、排泄物を観察して予後を立てたり、〈排泄物と病気の峠 (Krankheitsentscheidung, 分利 Krisis) とが因果関係にあると見なし〉たりするようになった。かくて次第に体液病理学 (Humoralpathologie) が発達し、それはまもなく支配的な位置を占めるようになった。体液病理学によれば、病気とは体を構成する体液の正しい混和状態からはずれることであり、〈悪くなった体液を排泄することによって健康が回復する〉のである。

このような病氣観に立てば、ヒポクラテス全集の中に自然治癒過程 (die natürlichen Heilungsvorgänge) を理解する鍵が潜んでいる。というのもこの自然治癒過程は、このコス学派の巨匠にとって急性熱病に典型的に見て取れるからである。〈体温上昇〉によって「自然 [治癒力]」(Physis) は誤った混和状態にある体液と原料を変化させ、煮熟 (pepsis) する。それによって悪しき体液は分泌され排泄される。「煮熟」(Kochung) によって無害になり健全な部分と分離された〈害毒〉(materia peccans) は、嘔吐、下痢、尿、痰、汗、時には鼻血や痔といった出血、膿、などによって排泄され、そのことによって病気の分利 (Krankheitsentscheidung)*や快復が起こる。

* 病気を引き起こす体液が、腸や膀胱や皮膚などを通して自然に排泄されたり、鼻血や痔の出血で速やかに排泄されたりするのは、もっとも好都合なケースである。自然治癒 (Naturhilfe) が滞っていたり不足していたりすると、ある場所に害毒が沈着したり (化膿 Apostasen)、もっと不都合なのは転移 (Metastasen) することである。その時には熱によるさらなる「煮熟」が必要であり、最終的に排泄できなければならない。これが極めて不完全であったり全くできないと、病氣は長引くし、場合によれば不治に終わる。

したがって排泄 (Exkretionen) や分泌 (Sekretionen) は生体の自助の働き (Selbsthilfe) の主要なやり方であり、〈発熱〉(Fieber) は治癒本能の道具なのである、それらが悪しき体液排除に必要な熟成、つまり病原となる体液の「煮熟」(Kochung) を引き起こすからである。

[S. 8] 全身疾患において体温が〈高熱〉になると、不潔な傷のような局所的疾患においては、異物や良くないものは局所的に熱を持って〈炎症〉となり煮熟され排泄される。発熱は体を駄目にする過程ではなく良くなる過程である、という考え方は、病気を切り抜けた後の精神的な高揚期にしばしば見られる。

しかし同時に強調しておかなければならないが、ヒポクラテス全集で発熱は、病気の過程においていつもどんなときにも良き出来事である、というのではおよそない。というのも多くの叙述から明らかなように、長期的な熱病の有害な影響はとりわけ周知の所である。それにしても卒中や痙攣や他の症状につながるような発熱は、場合によれば良い現象であると認めることがあり、特に四日熱の場合がそうである。この場合、例えば痙攣病に対しての治療効果が認められている。

関連する箇所は中でも次のものである。『箴言』(第4章第57節)、「痙攣や強直を起こしているときに熱を併発すると、その熱は病氣は治す」。一致する表現は『コス学派の予後』348節と『分利について』61節。——『箴言』第6章第40節、「季肋部 [左右の肋骨の下の部分] のあたりに、炎症を伴わない痛みがある場合、その痛みは熱が出ることによっておさまる」。『箴言』第8章 [邦語全集では第7章] 第52節、「肝臓に激痛がある場合、発熱するとその熱によってその痛みはなくなる」。『コス学派の予後』440節も同様。

〈四日熱の有する治癒効果〉については例えば以下の箇所を参照。『流行病第一巻』第3節 [邦語全集では第11節]、「どれにもまして危険がなく症状も軽いがもっとも長期にわたるものは四日熱である。四日熱それ自体、単にそういうものであるばかりでなく、他の重い病氣から守ってくれる」。『流行病第六巻』第6章第5節、「四日熱にかかっている人はこの大病 (つまりてんかん) にかからない。またすでにこの大病にかかっている人は、四日熱を併発すれば、この大病がおさまる」。『箴言』第5章第70節、「四日熱にかかっている人が痙攣におそわれることはほとんどない。反対に、先に痙攣におそわれた人がやがて四日熱を併発すれば、痙攣は止まる」。

ヒポクラテス全集における『箴言』や予後に関する様々な文書で、〈ある事情では〉、特定の症状が重なった場合、病気のあらわれは良き徴候とみなされたり、〈新たな症状が加わって、前からある病氣が良い方に向かう〉というような記述が多い。コス島

の賢者は現象の継起を確認し、その間の因果関係については沈黙するというのがしばしばであるが、後の人たちはこれらすべてをひとくくりにして、合目的な自然治癒（Naturhilfe）とみなした。おまけに人は軽率にもしばしばそれを一般化したので、このような風潮は時に宿命的と言えるほど治療に悪影響を与え、「治癒可能な」病氣と闘うことを厳禁するほどにもなった。例えば〈痔〉やいくつかの〈発疹〉などがそのような措置にあった。

[S. 9] 〈痔のもっている治療効果〉に関しては次の個所を参照。『箴言』第6章第11節、第21節、「黒胆汁性の病氣や腎臓病の場合、痔が併発するのはむしろ好ましい」。——「狂気の人に静脈瘤または痔が生じると、それらは狂気を治す」。——痔に関するヒポクラテスの特定の論文『痔について』は、結節はすべて除去することを勧めているが、それに対して『箴言』第6章第12節、「慢性の痔が治った場合、もし痔核が一つ残らずなくなっているようであれば、水腫が肺ろうにかかる危険がある」。——『コス学派の予後』第468節では、「卒中の患者に痔核（出血）が起こるのはよい」。——『分利について』[第41節]、「脳炎にかかった胆汁質の人が痔になるのは好ましい」。——『体液について』第20章、「痔のある人は、胸膜炎にも肺炎にも浸食性潰瘍にもせつ（Furunkel）[一種の化膿性皮膚炎]にも、テレビン様の潰瘍にもかからない。しばしば癩（皮膚病）や白癩にもかからない。しかし痔が変なときに治ってしまうと、多くのものがすぐに上のような病氣にかかり、しかもそれによって亡くなった」。——『流行病第四巻』第48節[邦語全集では第58節]、「アルキッポスは痔出血を起こしたが、治療を妨げられた。（それでも）治療を受けると精神錯乱を起こした。高熱が出ると、痔はおさまった」。

〈発疹〉はヒポクラテス全集では、急に多量に出る場合だけ、治療や分利につながる分泌とみなされた。『予言第二巻』第30節、43節、「極めて危険なのは痛みが頭から首や背中に降りてくる場合である。これらの患者は、膿瘍が起こると回復すると予想してよい、あるいは、咳をして膿を出すか、痔核が出るか、体に発疹やふけが現れた場合も回復する。頭部がふけ（痂皮）で覆われた場合もよい」。「苔癬、癩、白癩のいずれかが若いときか子供の時に起こったか、もしくは現れてから長い時間かかって少しずつ広がってきた場合、この発疹は〈[悪しき物質を排除する良き] 化膿ではなく、一個の病氣〉である、しかし、以上のなかのいずれかが〈突然多量に〉で

きた場合、それは良き化膿であろう」。——〈後世では皮膚病の多くを、悪しき体液の沈着でそれ自体治るものだとみなした。そして皮膚病を「撃退」することは、病気を悪化させ転移させて危険にする、と心配して、局所的に根本的に治療することが必要だったと考えられる場合でも、それをしばしば怖じ気づいて避けた〉。

確かにヒポクラテスは自然（Physis）が支配していることを畏敬の念をもって確信していたが——「自然に反すればすべては虚しい」（*physios gar antiprattouses kenea panta*）[G]——、だからといって後世の人々と異なりあらゆる誇張された夢想から醒めており、自然治癒力（Naturheilkraft）で成功した症例も失敗した症例も等しい真理愛をもって叙述し、〈自助の働き〉がしばしばおぼつかなくなったり、不完全になったり、〈動揺したり機能しなくなったり〉する様子を、率直に示している。[S. 10] それゆえ医者是不なる存在というのではおよそなく、極めて必要な存在である。たとえば、単に経過を見守り、ある場合には衛生上栄養上必要な生活秩序を課したりするという意味でも必要である。場合によれば、自然による救済（Naturhilfe）が極めてわずかで、ためらってなかなか生じず、あるいはそれによって、〈医術による救済〉（*Kunsthilfe*）で自然治癒力を補い支えてもらわねばならないときには、薬剤や他の手当てでもって医者が介入するという意味でも、必要なのである。とはいえ医術による援助は、治癒がなかなか生じないときに刺激を与え、病氣の峠がこないときに支え、反応がはげし過ぎるときに制御する、という場合に必要なのであり、それをなしうるのは、〈自然に備わる自助力がどのような骨折りをなすかを知り、どのような病氣でも、病氣に負けて生じる苦痛の症状と治癒につながる生体の防御反応とを区別できる〉、そのような医者だけである。ヒポクラテス流の医者は自らが〈自然の手伝い〉（*tes phuseos hyperetes*）であることに甘んじているのであり、自然をあえて征服しようとはしないのである。

ヒポクラテスの著作には、「自然」（Physis）は合目的性をもつという見解がいつも現れているし、また彼は、健康であれ病氣であれ有機体に対する自然の支配を賛美せずにはおれなかった。ガレノスによれば、ヒポクラテスは自然（Natur）の支配を認識しかつ賛嘆した最初の人であった。「かくてヒポクラテスは、はじめて自然のわざを認識し、それを常に賛嘆し謳った…。」[G]（ガレノス『ヒポクラテ

ス栄養論注釈』III, 14)。そのような傾向と完全に一致し、またヒポクラテス主義におそらく影響も受けて、〈プラトン〉と〈アリストテレス〉(『動物発生論』De generat., c. 10, § XXII; 『天空論』, 第2巻第4章)は自然の合目的性という考え方を最高度にまで発展させたし、ストア派の人々に至ってはしばしば愚かしくさえある目的主義 (Teleologismus) の旗振り役を潜称するに至った*。逆に哲学から医学に影響を与えたこととして、ヒポクラテスの後のアレクサンドリア時代に、内在的な目的行為の概念や、アリストテレスの「エンテレキー」(Entelechie) [アリストテレスの用語。可能性 (デュナミス) に対して現実性を意味し、エネルゲイアと同義] の概念が、同時に靈魂論 (Pneumalehre) や力動主義的観念 (dynamistische Vorstellungen) と共に、医学理論に入ってきたことがあげられる。[S. 11] しかし哲学ではむしろ、とくにレウキッポス (Leukippos) [前5世紀, デモクリトスと並んで原子論の祖といわれる] の原子論や機械論的自然観と結びついて、目的論への反撃が繰り返された**。同様に医学においても、特に生理学においては、自然そのものに全面的な合目的性や驚嘆すべき目的行為を容認する見解は、異議を免れることはできなかった。エラシストラトス (Erasistratos) [前3世紀のギリシア・ケオス島出身の医者, 生理学者] はもともと生理学的な過程を自然現象として説明しようとする傾向を大いにもっており、「自然」(Physis) の合目的性を原則的に認めてはいるにしても、有機体の個々の構造や機能を目的に反して無意味だとあえて位置づけたことは稀ではなかった***。

* ストア派の自然の神学 (Physikotheologie) [自然の秩序と合目的性から神の存在を類推する立場] の代表的創始者であるクリュシッポス (Chrysippos) [前3世紀のストア派の哲学者] は、彼の著書『洞察について』第4巻で、「人間の病気は自然により生じたのであるならば」[G], 身体の病弱や疾患という極めて大きな不幸が、宇宙の合目的性や摂理とどのように調和するのか、という問題に答えようとしている。ゲリウス (Gellius) [紀元2世紀のローマの随筆家] の『アッティカの夜』(Noct. Atticae, VIII (VI), 1) からこの哲学者が試みた解答を知ることができる。立派で役に立つたくさんのものと結びついた欠陥や病苦は、自然という創造力によって引き起こされた直接の産物ではなく、単に「付随して」(kata parakolouthesin), つまり、不可欠ではあっても副次的な帰結として、生じたのである。というも、例えば自然が人間の体を形成するとき、この創造と結びついた高い意図とできる限り合目的な装置からして、頭部がもっともきゅしゃで繊細な骨と結合される必要があった。しかしそれはより高次の目的観からすれば必要な装置ではあるが、結果としてあ

る欠点をもっていた。というも、頭部は外部に対して脆弱な保護壁しかもたず、ちょっとした動揺や衝突にも抵抗性がなくなるからである。「それゆえ、健康が生じる限りで、病気も困苦もまた生じたのである」[L]。

**エピクロス [前341頃—前270頃の原子論と快楽主義で有名なギリシアの哲学者] の哲学大系は目的論を完全に排除し、自然を機械的に説明しているが、それを別とすれば、アリストテレスの目的論に対する懐疑家はエレスス出身のテオフラストス (Theophrastos aus Eresos) [前372—前287, アリストテレスの弟子] であり、目的論に対する反対者はランプサコス出身のストラトン (Straton aus Lampsakos) [前270頃没。テオフラストスを継いでアリストテレスのリウケイオンの学頭となる] である。

***ガレノスの様々な個所を参照、例えば『ヒポクラテス栄養論注釈』III, 14。「というもエラシストラトスによれば、脾臓は無駄なものであり、腹膜ひだ (epiploon) も無駄であり、他の無数のものも無駄である」[G]。

医学における合目的性という考え方を徹底的に否定し、治癒力としての「自然」(Physis) というヒポクラテスの教えを非難し、それは幻想だと断言した最初の人々が、プルザの〈アスクレピアデス〉(Asklepiades von Prusa) [前124—前60, ローマで活躍した医者] である。彼の立場は、エピクロスとヘラクレイデス [前4世紀黒海南岸ポントス出身で、プラトン学派の哲学者] に依拠する〈原子論的・機械論的な自然観〉や彼の病気観から、論理的に生じたのである。病気は彼によれば、病的な状態は、〈原子の変化や、原子の運動の乱れや、汗孔と原子の関係の悪化〉、などから生じる。アスクレピアデスは基本的にそのように考えたので、病気という刺激に対する生体の合目的な反応を容認する余地はなかったし、〈秩序の回復は医者情熱的な介入による〉以外にはないと考えたことは、明らかであった。自然とは物体とその運動以外の何ものでもない、と彼は言っている。「万物が生じるのは必然であり、何ものも原因のないものではなく、また自然は物体とその運動以外の何ものでもない」[L] (Caelius Aurelianus, 『急性病』Acut. morb. 第1巻第14章)。[S. 12] 〈病気の時に「自然」(Physis) が助けてくれることをあてにすることはできない、自然 (Natur) だって時には危害を加えることもあるのだから〉: 「自然 (natura) は有益であるばかりではなく、有害でもある」[L] (同上)。ヒポクラテスはあくまで自然の叡智や、予見力、正義、技能などを賛美したが、それに全く反してアスクレピアデスは、自然のなすわざをあざ笑い、自然を骨折り損 (mataioponos) と呼んだ*。彼にとってヒポクラテ

スの治療術は、自然の治癒力を注意深く見守り、自然治癒力が効かないときにのみ介入するという傾向を持つものであり、それでは所詮「死の練習」(thanatou melete) [プラトンの『パイドン』(81a)における melete thanatou 参照] (ガレノス、『瀉血について』Galen, de venae sectione adversus Erasistratum, cap. 5), 〈死の世話人〉(Wärterin des Todes), と見えたとしても不思議ではない。

* ガレノス、『人体各部の働きについて』Galen, de usu part. corp. hum. 第5巻第5章。それに対してヒポクラテスは自然を、ガレノスが強調するように(同上, 第9章), 「生物のもつ巧みさであり先見の明だ」[G]と呼んだ(ガレノス、『ヒポクラテス栄養論注釈』III, 14, も参照)。

アスクレピアデスも鋭い観察家であるから、病気が突然変化することを見逃しはしなかったし、分利的展開(kritische Vorgänge)が起こることも否定していない。しかし分利そのもの(Krise)は彼の理論によれば、治癒行為という意味での「自然」によって引き起こされるのでもなく、体液の煮熟の産物でもなかったし、彼がそもそもあらゆる消化を否定するようになればますますそうでなくなった*。

* ケルスス[後1世紀のローマの著述家]の著書『医学について』第一巻の緒言によれば、アスクレピアデスの弟子たちは、食べ物は諸部分に砕かれ、それらは生のままで、口に入れられたときのように、体内で分割される、と唱えたという。「なぜなら、何ものも消化されず、生の材料のままであり、口に入った時の形のままで、体内へとすべて分割される」[L]。同様にCaelius Aurelianus(『急性病』第1巻第14章)はアスクレピアデスの見解を次のように再現している: 「われわれのうちにはそもそも消化は存在せず、胃における食べ物の生のままの解体があるだけであり、体の個々の部分を通過する」[L]。——ところですでにエラスストラトス(Erasistratos) [前315頃—前240頃の古代ギリシアの医学者、アレクサンドリアで活躍した] もヒポクラテスの消化説からずれてしまっている、というものは次のように言っているからである。「食料は胃ですりつぶされる」[L] (Celsus, 1. c.)。

以上の事柄すべてと異なり、奇妙なことにアスクレピアデスは、ケルススによれば(『医学について』, 第3巻第4章) 熱病に際しては専ら熱自身を治療手段として用いた。「しかしなかならず熱自身を、彼は自らの治療においては用いると公言した」[L]。同様に痙攣を伴う病気でも、発熱を引き起こすと自らが信じた薬を適用したが(カエリウス・アウレリアヌス Caelius Aurelianus [5世紀のローマの医者で、ガレノスに次いで有名], 『急性病』, 第3巻第

8章), もとよりそのことで彼が意図していたのはまさしく体温上昇であった。

ケルススは彼の『医学について』というみごとな書物で、アスクレピアデスに至る治療術と勃興した方法学派[アスクレピアデスの弟子、ラオディケイアのテミソン(前1世紀)に始まり、エペソスのソラノス(後1—2世紀)を代表とする医学派で、ヒポクラテスに反対して固体病理学を主張した。川喜田, 92—3頁参照]に一瞥を与えているが、また多くの個所で自然治癒力に対する信念を表明し、その信念と結びついた、医者の方に対する懐疑主義をほとんど隠しはしなかった。[S. 13] ヒポクラテス著作集の『法』における文章「自然に反すれば一切は虚しい」[G]に対応して、ケルススは次のように述べている。「いかなる病気においても[自然が]自らにもたらす幸いが医術よりも小さいということは決してない、有能な自然が反対すれば、医術は何の益をももたらさないのだから」[L] (第3巻第1章)。その書物の第7巻の序言では、「病気では幸運が大きな役割を果たすので、同じことがあるときには健康をもたらしあるときには効果がない。それゆえ、健康になるのが薬のせいなのか体のおかげ[自然治癒]なのか、どちらなのか疑わしい」[L]*。健康な人々への行動指針の最後でケルススは、「健康なときに病気に対する自然という保護手段を浪費しないように注意を促している」(cavendumque ne in secunda valetudine adversae praesidia consumantur) (第1巻第1章)。

* [ケルススの]『医学について』の序文の冒頭で、医術のすべての領域のなかで外科はもっとも明瞭な成果を示すことができる、と述べられている。薬物治療では事態はそれほど確実ではない、というのも一面ではときに薬物が存在しないことがあり、他面ではそれを適用しなくても患者が元気になったりするからである。「病気によれば、薬が最大に効いてどんな病気からの回復も極めて明白な場合もあるが、薬が効かずに嘆いたり、薬なしで回復したりすることもしばしばあるのは明らかである」[L]。したがって自然治癒力があるという推測は、薬物の効果が決して絶対的に確実なものではないという事実と、自然に治癒されることがあるという事実から、導き出された。これに関してはキケロ、『トゥスクラーヌム論叢』(Tusculan. disputat.) 第3巻第3章、のある個所も参照せよ。「体の治療には体と自然が大変重要である」(Ad corporum sanationem multum ipsa corpora et natura valent)。『神々の自然』においてキケロは注目すべき言葉を残している。「自然は、体内において、〈理性なくして〉動きつつ動かされる力である」(natura est vis quaedam <sine ratione> ciens motus in corpore)。

この書物の第2巻第8章でケルススは、ヒポクラテス著作集の『箴言』、『予後』、『コス学派の予後』、『予言』などに関連して、個々の病気におけるよき兆しを列挙している（その中には、ある種の喀痰、ある種の膿とその出る場所、特定の症候群における、月経、嘔吐、下痢、痔出血、静脈瘤、鼻血などの出現）。その折りに、発熱がしばしば治癒をもたらすことを、ケルススは自ら驚きながら確認している。「要するに熱自身がしばしば助けとなるのであり、そのことは極めて驚くべきこととみなされうる」[L]。例えば炎症を伴わない前胸部の痛みは、発熱によって癒されるし、肝臓の痛みを癒すのにも効果がある。[S. 14] 同様に慢性的な痙攣や硬直性痙攣は、その後に発熱が生じれば、全面的に癒されるし、排尿障害の後生じた小腸の病気は、発熱によって体温が上昇し排尿が増加することによって、緩和される。その章の末尾で、少なからざる〈自然救済〉、つまり、〈他の症状を追い出したりあるいは対抗的に働くような病状〉に、言及されているのは特徴的なことである。「上述した好都合な事情のたいていは〈自ずと〉生じるのであるから、そこから導き出せる結論は、医術が用いる手段に関しても、自然はもっとも大きな貢献を果たすことができる、ということである」[L]。

発熱に関して特に強調しておかねばならないことは、ケルススは発熱の治療効果をいつも承認するというのではおよそなく、反対に発熱のなかには危険なものもあることを指摘しており（第2巻第4章）、特にある種の症候群における発熱のあらわれを極めて危険な徴候であると説明している。

また極めて興味深いのは、『『医学について』の]第3巻のある個所で彼が、ある種の病気には、ときには病を重くしたり、ときには熱を出させたりして、別の症状を引き出そうとしていることである。「人間を熟慮すれば、ときには病気を新しく発症させたり増大させたり熱を大きくしたりすることもある」[L]*。

* 第3巻第9章。〈潜行性の発熱の治療〉を問題としているのであり、その場合には思い切った治療法で症状の変化を起こすのがよいとされた。病気を治療しやすくするための方法として、例えば香油や塩で摩擦するとか、熱の高いときにワインいり蜜酒や薄めたワインを3、4杯飲ませるといった、〈体温を高める〉手当てが挙げられる。「それ故そのことからしばしば、意図的に高い発熱が引き起こされ、熱はより大きな害毒を除去し、それを軽減しかつ癒す見込みを示す」[L]。

体液病理学やヒポクラテスの自然治癒力説に鋭く対立するのは、固体病理学〔ヒポクラテスの体液病理学に反対して、体の「固体部分」に発病の機序を求める立場。川喜田, 92頁, 参照〕に立つ〈方法学派〉である*。この学派の代表者は、アスクレピアデスほど極端ではなく、〈自然治癒〉の可能性を全く否定してしまうというのではないが、自然治癒を容認するとしても〈急性病〉の場合だけに限定して容認するのである。慢性病になれば、彼らの考えによれば、自然治癒ではなく専ら医者 of 積極的な介入が治療に結びつくのである。[S. 15] そのことは〈カエリウス・アウレリアヌス〉の慢性病に関する五巻本の序論でも明らかである。「それゆえ突発的であったり急性であったりする病気は、ある時は自ずと癒され、ある時は幸運や自然が好意を寄せて癒される。…それらは発汗や、鼻血や痔出血によって体外に排除される。…それに対して慢性的な、あるいはゆっくりと進行する病気は、…唯一医者の熟練を必要とし、自然や幸運では癒されない」[L]（『慢性病』序論, 1ff., 同第1巻第4章も参照のこと）。〈さらに方法学派の見解によれば、急性病と慢性病の最も重要な相違は、急性病は自ずと消失するのに対して、慢性病で長期にわたって体内で病気が進行して症状が形成された場合、自然治癒力や幸いな偶然などでなく、専ら医術の助けによって癒されうる、というところにある〉。このような方法学派の治療原則が示しているように、彼らは生体の自己救済をほとんどあてにしていなかったので、カエリウス・アウレリアヌスの、「体力こそが医者 of 手段に効果（作業力）を付与するものである」[L]（『慢性病』第2巻第12節）という言葉は、彼らの治療原則とほとんど調和しないものとなっている。

* 方法学派は病気を組織間の緊張（Gewebsspannung）の異常な増加・減少に帰した。代表的人物は、アスクレピアデスの弟子で、ラオディケイアのテミソン（Themison von Laodikeia）[前1世紀]、[それ以外に]トラレスのテッサロス（Tessalos von Tralles）、エフェソスのソラノス（Soranos von Ephesos）[後1－2世紀]がいた。ソラノスの『急性病と慢性病について』[G]は、カエリウス・アウレリアヌスの『急性病と慢性病について』[L]全8巻によってラテン語に訳されて私たちに伝えられている。

同様に方法学派によって慢性病に好んで適用されている、いわば「分利促進療法」（metasynkritische Kur）は、病的に変化した体組織の「調子を変え」ようとするものであるが、現代から見れば、彼らの否定していた自然治癒や自然救済の教えそのもので

ある。というのも、まさにこのやり方は、いわば体全体の物質代謝を喚起するやり方で、一種の刺激療法であり、生体の激しい反応を引き起こし、それによって治癒をもたらそうとするからである*。

* 循環的な物質代謝療法は、体を作り直す循環 (Cyclus recorporativus) と力を取り戻す循環 (Cyclus resumptivus) よりなる。前者は、様々な程度の断食による減食療法、胡椒、芥子、海葱などの辛いものの摂取、加えて温泉浴、積極的消極的な運動、からし泥軟膏、膏薬、などよりなり、後者は強壮食やそれ以外の適当な方法で体力を回復させる療法である。

〈精気学派〉(Pneumatiker) [方法学派の影響を受け、アッタレイアのアテナイオス (後1世紀) に始まる医学派、川喜田、94-5頁、参照] にとっては自然治癒力の問題へのスタンスは、この学派の代表者たちが、理論においては、ストア学派の目的論的な哲学と関連し、生命力説を唱え、実践においては、なにか必ず体液病理学に指針を見いだしたことによって、決定された。

〈アレタイオス〉(Aretaios) [後81頃-138頃の、小アジア東部カッパドキア出身の医者] は、病状の叙述においても治療上の規則においても、真のヒポクラテス主義を誰よりも徹底し、何度も〈自然のもつ癒しのわざ〉に畏敬をこめて言及しており*、自然とはアレタイオスにとっては生体の持つ力そのものであり、ある個所では自然救済を医術の救済よりも高く評価した。

* 『慢性病の原因と徴候について』(De caus. et sign. diuturn. morb.) 第1巻第13章。「内部で化膿性炎症 (apostasis) が生ずれば、自然は医者役割をますます果たす」[G]。

『急性病の治療について』(De curatione acut. morb.) 第2巻第3節、「自然は老人の死と若者の増加を喜ぶ」『慢性病の治療について』(De curatione morb. diuturn.) 第1巻第4章。「自然によって自ずから前もって定まった日——その後で全ての癒しが生じる——がいつであるかは人々は知らない」[G]。

[S. 16] 〈ルポス〉Rhuphos [小アジア西部エフェソス出身の医師、トラヤヌス帝 (98-117) の頃医療に従事] によれば、〈発熱〉は場合によれば自然な〈治療薬〉となり、痙攣病などの場合には〈人為的に発生させることも望ましい〉ものであり、アフリカ (リビア) のいくつかの民族ではわざわざそのために山羊の尿を飲むと伝えている*。

* オレイバシオス [4世紀前半、ペルガモン出身、ユリアヌス帝の侍医、『医学集成』を著す] 著作集 (Oeuvres d'Oribase, ed. Bussemaker-Daremberg) IV, 85. 「かくも立派な医者は、病に対して他のどの薬を探す必要もないほど、熱を

引き起こすことに委ねることができた。山羊の尿を飲むことが一番高熱を引き出す方法だといわれており、リビア人はそれを用いてそのようにして熱を引き起こすことで知られている」[G]。

ギリシャ人の医師エウエノル (Euenor)* も、山羊の尿が刺激的な性質を持っているので、熱を起こさせるためにそれを用いたといわれているが、自分で思いついたのかあるいはリビア人の話を聞いたのかははっきりしない。この珍しい話は、オレイバシオスによって伝えられたルポス Rhuphos の論文に出ている。その論文では、場合によれば発熱や他の病気が加わることは、体液病理学では〈害物の廃棄や移し替え〉を意味し、既存の病気に好影響を与えたり、あるいは病気を完全になくしてしまうことであり、すでにヒポクラテスの著作の様々な個所で教示していたことである (前述 S. 7, 8 参照)。このような自然による救済は、ルポスによれば医者が決して妨げてはならないものである。彼は既知の事柄を整理して述べるにとどまらず、自らの豊かな経験から導いた新たな素材を付け加えてもいる。

* プラクサゴラス (Praxagoras) [前4世紀、コス島出身の方法学派の医者] の門弟であり、クニドス学派の出でもある。Caelius Aurelianus, 『慢性病』第三巻第八章、『急性病』第二巻第16章、参照。

そのような自然による救済の例として、特に次の病気が [ルポスによって] 取り上げられている。

——熱病、その発熱、蒸発、浄化の作用による (嘔吐、排便、発汗による続発的分利的な排泄を通して)、例えば滲出性のカタルや冷湿の混和と不良から生じる卒中のような病気、さらに痙縮、痙攣、強縮などの場合。

[S. 17] ——マラリア、特に四日熱。四日熱はてんかん発作を防止する、あるいは四日熱になることによっててんかんが治る*、また憂鬱症や、ときに喘息**にも、効果がある、また他の熱病やある種の肌が荒れたりふけが出たりする皮膚病 (癩病など) にも効果がある。

* ルポスの語るところによれば、てんかんを病んでいたテウケル (Teucer) [テウクロス (Teukros) ともいう] はペルガモンの神殿で、アスクレピオスの神に病気からの解放を祈願した。神が現れて、今の病気を他の病気と交換する覚悟があるかと尋ねられた。テウケルは、自分はまったく健康を願っているが、もしも交換される病気が今よりも大きいものでなければ、その解決でも満足するであろう、と答えた。アスクレピオスの神が彼に言うことには、新しい病気はてんかんよりはるかにささやかなものであり、おまけに他のどの手段よ

りもてんかんを確実に癒すという。テウケルはこの神が彼に定めた病気を引き受け、〈四日熱〉になり、そしててんかんから完全に解放された。

**そのような場合、どうして治癒が生じるのか、は説明することができないとルボスは言っている。

——痔は憂鬱症や、精神錯乱、てんかんなどに良い方に働く。めまい、吐血、胸膜炎、肺炎、急性病、悪性潰瘍、ある種の皮膚病（ライ病や発疹）を防ぐ。痔がどのような治療効果を持ち、他の病気に対する防御効果はどのくらい大きいかということは、習慣的な痔出血が止まればどのような結果が生じるかということから明らかとなる。静脈瘤も同様な効果を持っているが痔出血ほど大きくはない。痔核や静脈瘤の除去は危険を伴わないわけではなく、少なくとも他の種類の体液排出には、配慮しなければならない。

——関節の転移性腫脹、耳のあたりの腫瘍、膿瘍、吹き出物（発疹）は場合によりまた場所により長期の発熱を治す。

——慢性的「赤痢」はてんかん、めまい、憂鬱症、ヒステリー、腰痛を治すことがある。医者も過去に病気の観察からなにがしかを学んだら、その経過を模倣して、〈腰痛の場合にはきつい刺激的な浣腸〉を処方し、出血や粘液分泌を促す医者もいれば、腰部に焼灼術を用いて、〈病気を治すためにわざと潰瘍を作り出す〉医者もいる。

——胸膜炎は「胸膜肺炎」(Peripneumonie)を治す。下痢は嘔吐、腎臓結石、膀胱結石（結腸痛）を治す。横隔膜炎と嗜眠熱は対立関係にある。化膿した耳だれや鼻水は頭痛を止める。痛風は他の病気を防いでくれる。痛風発作を抑えるときには悪い結果が生じる。また普段下剤を用いている人々で下痢を余り性急に止めることも、悪い結果を引き起こす。ルボスは吹き出物のもっている治癒と浄化の効果を特に強調している。「あらゆる種類の皮膚の発疹が良きものであると同様に、白癬も癩も疥癬も憂鬱症とてんかんを治した」[G]。

[S. 18] [四日] 熱には治療効果があるという信仰は医者でない人々の世界にまでつとに広がっており、そのことはセネカ (Seneca) [ローマ帝政初期のストア派哲学者] のある叙述や、アウルス・ゲリウスの『アッティカの夜』(XVII, 12) に見て取れる。後者によれば、弁論家のファヴォリヌス (Favorinus) [1 世紀末から 2 世紀にかけてのローマの弁論家] は四日熱への賛辞をまとめ、プラトンの

『ティマイオス』の関連箇所をも根拠にあげている。「[ファヴォリヌスは] 発熱の功德の証人にプラトンをあげている、というのも [ファヴォリヌスによれば] プラトンは、四日熱にかかって回復し体力を戻した人は、後に前よりも丈夫になりしかりする、と書いているそうだ」[L]。

〈ガレノス〉の生理学は、ある意味で合目的性という考え方の証明そのものであるが、ヒポクラテスの教えにしたがって、〈自然治癒力 (Heilkraft der Natur) の存在を承認すること〉を、〈治療の最高方針〉とし、対立する考え方をすべて鋭く退け、「自然」(Physis) が治療するのを支えることを医者のものであると説明した。

このペルガモン出身の医者は後世の医学に対して絶大な影響力をふるうこととなった。しかし医者への働きは自然を支えることだという原則を大幅に踏み外し、おまけにヒポクラテスによって芸術的なまでに理解されていた患者の取り扱い方を、固定した似而非科学的な形式に押し込むことによって、かえって医学に甚大な被害を及ぼした。ガレノスのエピゴーネンたちは彼の繁忙な治療に輪をかけていろいろ試みたので、〈医者は自然 [治癒力] の下僕に過ぎない〉という原則に、言葉や〈理論〉の上では従っていたが、実際の臨床ではまさしくグロテスクな薬剤過多に頼り、薬を投与しない方がときにはよい治療になるということを完全に忘却した。「薬を用いないのがときにはよい薬である」[G] (ガレノス『ヒポクラテスの関節論』)。

ヒポクラテス同様ガレノスも、〈自然〉(Physis) は体をつくり、栄養や成長を図りコントロールするだけでなく、病的な不良を元に戻そうとし、健康回復の主要な要素を形づくっている、と説いている。〈分利時排泄〉は健康に至る道を形成している。例えばヒポクラテスの栄養に関する著作の註釈でガレノスは次のように記している。「というのも自然は、ヒポクラテスもどこかで記しているように、病気の医者である。もしも生き物の救済のためにあらゆることするならば、つまり、たくさんの汗を出したり尿や腹部を通して [大小便で] あるいは嘔吐で、苦しみのもととなっている体液を排泄して、害毒をかの第一人者である自然が癒すならば、それは結構なことである」[G] ([『ヒポクラテス栄養論註釈』? Comment. III, 14])。ヒポクラテスという模範を越えて、「自然」の概念をガレノスはずっと鋭く把握しようとしている*。「自然といえばいつも、一切の本質と体質を言う、つまり、熱、冷、乾、湿、の基本

的要素からなる体質を言う」[G]と『気質論』(de tempermentis)第3巻第4章にある。言いかえれば、自然の作用の仕方をより正確に定め、自然救済と人為救済の可能域をお互いに区別しようとしているのである。

*「自然」(Natur)の概念にガレノスは様々な個所で言及している。そこから明らかなように、「自然」(Physis)という言葉の意味が、(医者や哲学者などの)彼の先行者において、強調が物質的なもの(das Stoffliche)におかれるのと力動的なもの([das] Dynamische)におかれるのに応じて、ずいぶん異なる。すでにヒポクラテス文書においてこの言葉の意味は多義的であり、ある時には自然現象の原因(内在熱thermon emphuron, つまり生体の熱), またある時には基本的な性質や四体液, つまり実質的なもの, が注目の的となっている。「ヒポクラテスによれば自然という言葉で多くのものが意味されている」[G](ヒポクラテス全集の『急性病の食事について』の注釈第2巻第21節)。さらに言えば、ガレノスは「自然」で、体に内在する諸力を指す傾向があり、この諸力が体の全機能を指導しているのである。「力」はガレノスにとってはまさに〈現象の原因〉そのものである、「というも力とは働きの第一の原因である」[G](『自然の働きについて』de naturalibus facultatibus, 第1巻第4章)。

[S. 19] ガレノスの理論によれば自然(Natur)は、機能障害を正したり健康を回復したりするために、生体において生命を正常に保つと同じ力を用いる。それは体を形づくり、成長や栄養補給を成り立たせる力である。それはまた、自然力(dynamis physike)の下位概念である四つの部分力であるところの、引力(dynamis helktike), 変化力(dynamis alloiotike), 抑止力(dynamis kathektike), 排出力(dynamis apokritike)である。「これらの力で生命は健康を保持するだけでなく、病気をも癒す」(ガレノス『ヒポクラテス流行病第6巻』注釈第5巻第1節, 『症候の相違について』de sympt. diff. 第4章, をも参照)。ガレノスはこの四つの自然の力のうちで最後の力, つまり排出力に, 治療における最大の意義を付与したが, その理由は容易に理解できる。というのもこの排出力こそ, 分利を引き起こし*, 害毒(materia peccans)を排出させるからである。従って臨床においてガレノスは, 自然の治療力を支えるために, 専ら有害物の排除に注意を向けたが, かといって引力, 抑止力, 変化力を無視したりそれらに対立するように治療したりすることはなかった。

*『分利の日々について』(De diebus decretoriis)第3巻第8章。「胃に関してと同様に, 全身についても示されたように, 思うに, 力(dynamis)は体のあらゆる部分に存在し, しかも他の部分とは異なり, 病気の時に分利を生み出すのである…」[G]。

〈発熱〉をガレノスは一般的には自然がもっている治療手段とみなしているが, しかしその表現はあくまで用心深く控えめである。そして発熱の程度や性質によっては引き起こされるかも知れない有害性を, 忘れずに指摘している。彼は分利というものの(die Krisen)を有害物質が徹底的に排出されることと(mit den kritischen Ausscheidungen)同じとは考えず, これらの物質が徹底的に排出される数日間に関しては(hinsichtlich der kritischen Tagen), 一定の憂慮を表明していた。

先人の記述に関連してガレノスは, 四日熱以外になおいくつかの, 保護手段や治療手段として役立つかも知れないほかの併発疾患をあげている。

[S. 20] 四日熱はてんかんを防止したりそれを癒したりする。発熱は痙攣, カタル, 「喘息」に好影響を与える。下痢は目の炎症, 胸焼け, 「完穀下痢」(Lienterie)〔便のなかに不消化物が混じっている下痢〕を治す。胸膜炎と肺炎, 「脳炎」と「嗜眠症」は互いに対立する。痔は憂鬱症や脾臓硬化を防止し治す。同様の効果は静脈瘤にもある。また静脈瘤は足部痛風や関節炎にも効果がある。

極めて詳細にガレノスは〈傷の癒える過程〉*を叙述しており, 中でも傷と潰瘍の手当てについては詳しい。下肢骨折の治療はガレノスにとっては, 〈医者と自然の作業領域の境界〉を見いだすための格好の例である**。ヒポクラテスの文章「自然は病気の医者である」を検討する中で, このペルガモン出身の医者の達した結論は, 〈自然と医者の協力〉によって治療は成立するということである。確かに指導的な自然の役割に対して, 医者の役割は従属的ではあるが, しかしだからといって極めて重要な役割であることには変わりはない。「自然が病気を癒すという方が私たちにとってより良いように思われる。しかし正しくは医術も医者も癒すのである」[G](『ヒポクラテス流行病第6巻』注釈第5巻第1節)

*『医術』Ars medica (technē iatrike), 第29, 30, 32章。単純に肉体の一部が剥離したら, 離断(Kontinuitätstrennung)の治療や修復を自然は, 癒着や癒合で行う。「にかかわで傷や生来の癒着を自然は回復する」[G]。医者の課題は, 1. 分かれている部分を合わせる, 2. それを合わせたまま保持する, 3. なにかが傷口に入ったり集まったりしないようにする, そのようなことは対孔(Gegenöffnungen, [?])によって防ぐことができる, 4. 傷の健康な部分を拡大する, それは乾燥剤(austrocknende Mittel)によってできる。――骨の離断では仮骨形成によってのみ治療されるが, 組織欠損(Substanzverlust)を伴う創傷の場合は, 栄養物の補給と癒着という二つの目的が充たされなければならない。組織欠損が

「肉」によって補填されると、はん痕が生じる。『治療の書』De methodo medendi, 第3巻第3章も参照。

** [ガレノスの]『パトロピロスへ——医術の体系について』De constitutione artis medicae ad Patrophilum liber, 第12章。「身体が回復する原因は自然と医者との両方にある。自然だけでは医者だけでは不可能である。自然にとって骨折の場合、その部分を変えたり四肢を曲げたりして、正常化したり修復することは不可能であるが、医者には可能である。傷のくぼみに肉が付くのは、自然には可能だが医者には不可能である。半消化や未消化のものの消化も同じである。これらにおいて医者は自然に奉仕し協調する…」[G]。

ビザンチンの作家の中で特にトラレスのアレクサンドロス (Alexandros von Tralles) [525頃—605頃, 小アジア・トラレス出身で、ローマで活躍したビザンチン期の医者] は、常に自然治癒力に注意を払うことを自らの治療規則となし、医者は科学の原則や技術の能力に巧みであると同じように、自然治癒力を用いるのに巧みでなければならない、とした。彼は自然に備わる治癒力が、ときに人為を介さずに治癒をもたらすことをしばしば指摘し、患者の〈治癒本能〉を全く閑却してしまわないように戒めている。[S. 21] 彼によれば医者の仕事は、自己救済を促し支えることにあり、分利における排泄や出血などによって自然は体から毒素を排除しようとしているのだから、排泄や出血を妨げてはならない、という。

例えば濃厚で未消化の体液が胃にたまっているときには、嘔吐はアレクサンドロスによれば体からその体液を排泄しようとする自然の努力を意味している。「赤痢」の治療で彼は、——下痢が顕著でなく、有害物質の除去のために自然が生じさせた症状であると見られる場合のことだが——、何ら処方する必要を認めず、多血症の患者には瀉血を施したり下剤を処方したりするだけであった。——トラレスのアレクサンドロスは、Th. プッシュマン (Puschmann) による原文編集と翻訳, 第1巻, 416頁によれば、「…しかしまず確認すべきは、この病気が生じたのは、腸の化膿が原発性なのか、あるいは他の器官が病気になって生じた二次性なのか、どちらなのかということである。というのもしばしば言えることだが、悪い部分は体のどこからでも生じるし、それを自然は融かしたり、悪い体液が過剰にあるときには排泄したりするからである。そのような場合には、〈自然治癒力の支配が適切〉なのを、却って邪魔したりして、患者の負担を大きくするようなことをしてはならない。そのことを証しする事情として、患者は

排便の後はおかえて元気になるものであり、医者が便通 (下痢) を止めようとすれば、確かに一時的には多少の緩解を得るが、後からまもなく下痢が再び起こり、二倍も激しくなる、ということをおこなうことができる。従ってそのような症状のときには自然治癒力を支えるような処方をすべきである。またそのような症状が体液過剰で生じたのなら、瀉血やときには下剤を処方することは必ずしも不適切ではない。」

熱病に関するある著作 (『熱病簡約概論』[G]) の著者は、おそらくアレクサンドリアのソフィスト、〈パラディオス〉(Palladios) [6世紀後半] であるが、彼はアレクサンドロスよりもはるかにはっきりと次のように述べている。「体内にあって先のことを配慮する自然は、あたかも良医の如く体をいたわり、始終つきまとい苦しめる害を鎮め食いつぶすためには、発熱を引き起こす*。」

* パラディオスの『熱病簡約概論』(Palladii de febris concisa synopsis, ed. Jo. St. Bernard, Lugd. Batav. 1745, 第26章)。「熱病は自然の有する先見の明によってひきつけの後で起こる、というのも、先見の明ある自然は内部にあり、良き医者のように体を養い、熱が燃え上がるように配慮し、残留して患者を苦しめているものを燃やし尽くす原因となる」[G]。——合目的であるかも知れないが、必ずしも熟慮や配慮を伴ったとは言えない自然の作用の仕方を、13世紀ビザンチンの作家デメトリオス・ペパゴメノス (Demetrios Pepagomenos) は次の文で特徴づけている。「自然は無分別 (alogos) であるが、分別に従って (kata logon) 行為する」[G] (『足指通風について』De podagra, 第1章)。

アレクサンドロスの最大の先行者である〈アエティオス〉(Aetios) [6世紀中頃メソポタミアのアミータに生まれ、ユスティニアヌス帝に使えた医者、アレクサンドロスにやや先んじる、川喜田, 117—8頁, 参照] も、自然治癒力の意義を確信し、治療の目的は、自然が病気と闘うのを加勢することにあると明言している (Tetrabibl. II, Serm. I, cap. 1)。

〈アラビアの医学文献〉は、主としてガレノスの体系に則っており、自然治癒力にしかるべき尊敬をはらっているとはいうものの、たいていの医者の治療方針は、自然治癒過程を支えるための手伝いと言うところから大幅に逸脱してしまっている。[S. 22] いずれにせよ豊かな経験と深い洞察の証として評価すべきなのは、〈イサク・ユダエウス〉(Isaac Judaeus) [10世紀のユダヤ人の医者で、初めエジプトで、後にチュニアのケルワンで活躍した] の、たいていの患者は自然の助けで治る、という言葉*

であり、〈アヴィセンナ〉(Avicenna) [980–1037, アラビア名, イブン・シーナー, アラビア医学の代表であると同時に哲学者, 第2のアリストテレスと称され, トマス・アクィナスに影響を与えた] の、一見全く絶望的な患者でも〈自然治癒力〉の存在を常に考慮せねばならない、という要請も同様である。病気を起こすものと自然治癒努力の関係は、〈自然と病気の闘い〉という構図で極めて生き生きと描かれているが、この戦いのクライマックスが分利の時である**。アヴィセンナも明晰に認識していることだが、結局のところ治療を可能とするのは生体に内在する力であり、それに比して食餌や薬剤は支えたり鼓舞したりして働くに止まる***。ギリシャ医学同様アラビア医学においても、いくつかの併発病には治癒効果が認められている****。

* 医道論(義務論)の書 Musar harophim (ドイツ語の翻訳は D. Kaufmann, Magz. f.d. Wiss. d. Judentums, Berlin 1884) 参照。

** イサク・ユダエウスは次のように述べている: 「〈自然と病気の間に戦いが生じる〉。それらの戦いによって生じる作用は分利と呼ばれ、自然が病気を凌駕したり病気が自然から逃げたりすれば、それは良き分利といわれる」 [L]。

アヴィセンナの『医学規範』(Canon medicane) からは、例えば次の個所を引用することができる (Lib. IV, fen. 1, Tract. 1, cap. 3 及び Lib. IV, Fen 2, Tract. 1, cap. 2) 「〈分利〉の宣言とは、〈あたかも国の外の敵である体の病と、あたかも国を守っている主人である自然〉の、両者の間でまず軽微な戦いが続き、それらによって癒されず、やがて〈両者の間に激しい戦闘が始まる〉状態である。…かくて感じられないほどの〔僅かの〕量の時間内で、〔両者の〕分離が生じる (deinde fit separatio in tempore non sensatae quantitatis), それはあたかもある瞬間に主人〔である自然〕が外部のものをうち負かさか、国の外の敵が国王を打倒するかである。」 [L] ***Canon, Lib. IV, Fen. 1, Tract. 2, cap. 8. 「つまり癒すのは〔自然の持つ〕力 (virtus) なのであって医者ではない、医者は道具を力に変えるようにするのだから」 (Curans enim est virtus, non medicus, quoniam medicus facit pervenire instrumenta ad virtutem) [L]。

**** 例えば四日熱は憂鬱症、てんかん、痙攣を癒す (Canon medicinae, Lib. IV, Fen. 1, Tract. 2, cap. 62)。

臨床的観察と自然治療で疑いもなく傑出した代表家として、アラビア人の間ではラーゼス (Rhazes) [アラビア語でラージー, 864頃–925/932, 中世イラン屈指の哲学者, 医学者] ほど名声あふれる人はいない。そして後に彼に帰依した人々の中で、自然治癒力の紛れもない信奉者として特にマイモニデス (Maimonides) [1135–1204, スペイン出身のユダヤ教徒で思想家, 医師] は名前を挙げるに値する。彼

の箴言集 (VI, 21) と他の著作、特にスルタン, al-Malik al Afdal に宛てた食餌に関する公開書簡で、自然による救済は多くの場合それだけで十分であり、逆にそれを欠くと医術は効果を発揮しない、と指摘して彼は倦まなかった。マイモニデスが言うように、ヒポクラテスは多くの個所で、医者は自然を支えさえすればよいと、自然の賛歌を歌っている。[S. 23] ラーゼスの教えによれば、「病気が病人の力より強ければ、医者は全く救うことはできない。病人の力が病気よりも強ければ、自然は病気を癒すことができる。病人の力と病気が均衡を保つ時には、自然を支え、自然の作用に障害となるものを除去するために、医者が必要となる」。

〈中世のヨーロッパ医学〉は自然治癒力の問題史にとって重要なものはほとんど提供していない。もちろん理論上は、「自然が健康にし、医者が癒す」 (Natura sanat, medicus curat) という人口に膾炙した言葉にこめられた見解のもとにあった。しかし実際には、特に中世最後の数世紀、アラビア主義 (Arabismus) の影響下に際限なく薬物中毒となった中世の治療術は、ヒポクラテスの患者の扱い方に対して、極めてどぎつい対立を示した。薬剤の適用は非常に巧妙に案出され、また極度に高い評価*を受けていた。そのことと相まって、医者への営みは、自然の治癒過程の単なる補助であり支えに過ぎない、というのと全く別の様相に次第になっていった。それを認識するためには、医学の主要作品や重要文献に一瞥を加えるだけで十分である。これらの作品には、危険で牢固たるその種の暗示力が、鮮明に示されている。ただ極めて例外的に、一条の光線がこの精神の闇を貫くことがあった。例えば〈ギルベルツス・アングリクス〉 (Gilbertus Anglicus) (13世紀) [13世紀前半の、イギリスで最初にヨーロッパ全域での名声を博した医者] は彼の『医学概論』 (Compendium medicinae) のいくつかの個所で、ヒポクラテスの単純で待機的な (exspektativ) 治療法を遵守する傾向を漏らしている。しかし同じ著者がすぐにこの見解を再び放棄しているのだが、それは、さもなければ彼のいうところでは、同時代人からは変人と見えかねないからだという。このことから時代全体の風潮は推して知るべし、と言えよう! [S. 24] おそらくほんの僅かの医者であろうが、食餌・待機療法の方を薬物療法よりも重視した人もいた。例えば〈アルナルドゥス・デ・ヴィラノーヴァ〉 (Arnaldus de Villanova) [1240頃–1311頃のスペインの錬金術的哲学者] は『風刺詩』 (Parabolae) や

他の著作で食餌・待機療法を勧めている**。もっともアラビア医学やヨーロッパ中世医学の乱診乱療 (Polypragmasie) を評価する場合に忘れてならないことは、薬剤、例えば〈催吐薬〉、〈緩下剤〉、〈峻下剤〉などの過剰な投与、静脈切開 (瀉血) や除血法 (乱切り Skrifikation) によったりよらなかったりする放血、血吸蛭の適用、焼灼術、腐食剤や発泡膏、串線法 (Haarseilen) [打膿法 (排膿法の一つ)] などの適用) の過度の適用といえども、その意図は、自然の努力を支え、害物を排泄したり、体内のある個所から他の個所に導出したりする、ということである。その場合重要なのは、なによりも自然の〈指導〉に従う、ということであり、そこからはずれるのはある種の指示や規則の遵守が必要な場合だけである、つまり特定の場合に自然によって前もって指示された排出法以外の方法をとる場合だけである。スコラ医学は、体内の支配的な力に関するガレノスやアラビア医学の学説を、極度に繊細なまでに紡ぎだしたが、そのスコラ医学において、自然やそれを支える薬剤の作用の仕方が弁証法的に (dialektisch) 詳述されているということは、何ら奇異なことではない。例えばペトルス・トゥリサヌス (Petrus Turisanus) (14世紀) [14世紀半ばに亡くなったイタリア出身の医者] によるガレノスの『医術』 (Ars parva) [Ars medica のこと。川喜田、拙訳凡例の上掲書、註6. 26, 参照] への有名な註釈の一節をひくことができる、そこでは、緩下剤の作用は直接的ではなく、間接的に、つまり〈自然治癒力を刺激すること〉によって、生じるという見解が述べられている***。

* 中世の薬剤の取り扱いに対するみごとな洞察を、例えばヨハネス・デ・サンクト・アマンド (Johannes de St. Amando) [13世紀、ベルギーのトゥールネー聖堂の司教座聖堂参事会員で医者] の『花床』 (Areolae) が提供している。そこでは薬剤は27種類に分類されている。つまり、〈清拭剤〉 (Abstersiva) (濃く粘い体液の排除)、〈焼灼剤〉 (adustiva) (容易に腐食させる)、〈軟下剤〉 (aperitiva) (緩下剤、その中には熟成剤 remedia maturantia、つまり膿瘍を熟成させる薬剤)、〈誘引剤〉 (attractiva) (体液を深部から、例えば関節から、体表へ導く薬剤)、〈腐食剤〉 (corrosiva) (腐食や潰瘍を作る薬剤)、皮膚を形成する〈強固剤〉 (consolidantia) (乾燥、収縮剤)、〈強化剤〉 (confortativa) (強くする薬剤)、〈収縮剤〉 (constrictiva) (収斂剤)、〈血液抑止剤〉 (constringentia sanguinem) (止血剤)、〈乾燥剤〉 (exsiccativa) (余剰の水分を吸収する薬剤)、〈苛性緩和剤〉 (frangentia acuitatem) (苛性体液の緩和剤)、〈鼓腸分解剤〉 (dissolventia ventositatem) (鼓腸を治す薬剤)、〈膠着剤〉 (conglutinativa) (器官の孔を塞ぐ薬剤)、〈切開剤〉 (incisiva)、〈膨張 [改善] 剤〉

(inflativa) (駆風薬 Carminativa)、〈緩和剤〉 (lenitiva)、〈入浴剤〉 (lavativa)、もっと強い〈清淨剤〉 (mundificativa) (上記の清拭剤に類似)、〈成熟剤〉 (maturativa) (化膿剤)、〈腐敗剤〉 (putrefacientia) (腐敗や化膿を促進)、〈利尿剤〉 (diuretica)、〈分解剤〉 (resolutiva)、〈引赤剤〉 (rubificantia)、〈薄弱剤〉 (subtiliativa) (薄める薬剤)、〈止血剤〉 (styptica)、〈聴覚障害剤〉 (聞こえなくする薬剤)、〈発疱剤〉 (vesicantia) 以下では臓器剤 (Organmittel) が扱われており、その中には膿瘍剤や傷薬がある。前者はさらに、反射剤 (分解剤)、熟成剤、溶解剤、鎮痛剤。後者は、止血剤、化膿防止剤、創傷分泌浄化剤、顆粒防止剤、体重減少防止剤。

『健康保持について』という著作でアルナルドゥスはさらに次のように記している、「自然、その知恵は限りなく、これらすべての作成者である。医者は、祝福された神の善意と助力に恵まれた下僕である」 (Natura, cujus sapientiae non est finis, omnium horum artifex est, medicus vero minister cur bonitate et adjutorio Dei benedicti)。『葡萄酒について』という著作では、「それゆえ神が学問と知恵を与えたかの医者に幸いである、というのも彼は自然の友だからである」 [L]。*通痢 (便通があること) は薬物にある自然の吸引力によってではなく、腸間膜腺の開口部に加えられた多くの刺激と多刺によって、開口部が弛緩し、押し止めることができなくなるからである。すなわち、何らかの形で刺激を受けた自然が痛みを感じているその箇所へ体液を押し出すのである。だがこのような排出は、いかなる薬物によるのでもなく、もっと自然に帰せられるのである [L]。

おそらく最悪の結果を招いたのは乱診乱療 (Polypragmasie) にして多薬投与 (Polypharmacie) であったであろう、というのは、外科の領域ではそれは、実際には自然治癒力の否定につながったからである。ここではただ傷の手当てを指摘するだけで十分であろう。とはいえそれはブルーノ・フォン・ロンゴブルゴ (Bruno von Longoburgo) [13世紀イタリアの外科医]、ボローニャの外科学学校 (その教授〈フーゴ・フォン・ルッカ〉 Hugo von Lucca [11世紀半ばから12世紀半ば、イタリア・ルッカ出身、ボローニャ市付医師]、〈アンリ・ド・モンドヴル〉 (Henri de Mondeville) [1260頃-1325、フランスのノルマンディー生まれ、モンペリエ、パリで学んだ外科医] らの例外を除いて、普通のやり方であった。傷の治療ではたいていわざと化膿するようにしたし*、古代の外科と比べてははっきりと後退して、自然に「第一の意向」 (prima intentio) [?] を認めず、本来もっと立派なことにふさわしい熱心さで、余計で有害な薬剤や治療法に熱中したが、そのような治療法は、創傷治癒の自然な過程を無視したり、それに無知であったり、それを低く見積もったりしたことの結果に他ならなかった。このような致命

な誤りに、〈テオデリッヒ〉(Theoderich) [1206-98, フーゴ・フォン・ルッカの息子でボローニャ学派の外科医。イタリア北東部チェルビアの司教となって死す]**のような人は正当にも警鐘を促したが、無駄であった。〈自然を抑えるということは、癒着 (conglutatio) や結合 (consolidatio) を禁ずるのと変わりはない〉[L]。また残念なことに後世の人々の中でも、アンリ・ド・モンドヴィルのような人の声はかき消されてしまった、実は彼こそ自然治癒力の意義を十全に認め、自らの確信を次の言葉において表現した。「というのは自然はいわばあたかもバイオリン奏者のように、その音色で踊り手たちを導いて、リズムをとっているのである。我々医者や外

科医はいわば、その踊り手たちなのであって、ちょうど自然がバイオリンを奏でるように、それにリズムを合わせて踊らねばならないのである」[L]。

* サレルノの外科医たちは、傷の化膿を促進する傾向をもっていたが、それはヒポクラテスの〈Laxa bona, cruda vero mala〉(弛緩はよいが出血はいけない) に依拠してのことであった。ボローニャの外科学校は傷を乾燥させる治療法を用いたが、その場合ガレノスの次の言葉に拠っていた: *Siccum sano est propinquius, humidum vero non sano* (乾燥は健康により近いが、湿気は反対に近くない) (『医学大系』Meth. med. 第6巻第5章)。

**テオドリッヒはそれに対して、傷口に空豆をおくと、それによって傷が化膿して良くなる、と明言している (『外科学』Cyrurgia 第2巻第11章)。

Max Neuburger : Die Lehre von der Heilkraft der Natur, Kap. 1, 1926, translated by Hiroshi Hosomi.

Hiroshi Hosomi

SUMMARY

Until the first half of the 19. century the polypragmasy and polypharmacy in the name of the 'heroic' medicine had flourished. Since the last quarter of that century the modern scientific medicine appeared and criticised the the 'heroic' medicine, but it has been caught in the logic of the 'specific aetiology'. In this way both, the 'heroic' and the modern medicine, have forgotten the importance of the traditional concept 'vis medicatrix naturae' of Hippocrates. Max Neuburger, the Viennese Historian of Medicine, has followed the History of the concept since Hippocrates to the first half of the 19. century in his book 'The Theory of the Healing Power of the Nature'. The first chapter deals with the Antiquity and Middle Ages. Hippocrates' respect for the 'physis' is expressed in his words : nature is the physician of the illness, and he and his follower Galen were influential. But the counter-current, represented for example by the materialist Asclepiades of Prusa, saying, Nature is sometimes erroneous, was strong enough too. The Nature concept was almost lost in the end of the Middle Ages.